

---

# 山頂の事件

よつつん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

山頂の事件

### 【Zコード】

Z6480A

### 【作者名】

よつしん

### 【あらすじ】

迷推理をした後に必ず名推理をする変な名探偵尾島健也の息子の尾島健次が宿泊学習を行った。するとそこで誘拐事件がおきた。さらに宝探しまで加わってきた。尾島健次はお父さんのいない中少年探偵団を作り事件解決に挑む。

## 第一話 序章（前書き）

小五の僕が書いたのでおかしい点があるかもしませんが気にしないでください。

## 第一話 序章

明日は絶対楽しい日になるー。なぜかと云うと今日は、初めての森林学校だー・・・というわけで今から始まる物語はその初めての森林学校で起きたことです。

一日寝ているときに先生の見張りがついている場所で誘拐が起きた。

そして一日にみつけた不思議な紙と書かれたこと。

そして、幽霊。さらに、健也と警察の関係と間でおきた事件と人間消失事件とそれにかかわってくる男の

メインの一つの事件 + 宝探しの謎一つ + オカルト + 後日起きた事件二つ + 謎の男の推理小説です。

まずは物語を始める前に、登場人物の紹介をしましょう。

まずは語り手である僕、姓は男（あつ、名前を見ればわかるか）の尾島健次です・・・・・うーんあまり

僕って特徴ないなあひとつあるとすればパズルが得意ぐらーカナあ。まあこれから話を進めていくわけだからそれを見て性格などを考えて下さい。（ちなみに茶木茶木小学校の四年生です。）

次は主人公で姓は男（「だからわかるつて」てシッコリはやめて下さいね）の尾島健也、

僕のお父さんです。・・・・うん！これはいっぱいあります！

まず職業は新聞記者で迷・名探偵（これの意味は後で説明します）。性格は、まず目立ちたがり屋で自信過剰のお父さんです。

後は、お父さんはある一部の上司の言つことなら何でも聞いちゃう。だけど、自分が認めない人の言つことは、絶対に上司でもいつ」とを聞かない。

今、僕が知っている、言つことを聞く上司さんは一郎さんとお父さんの幼なじみの正一さんだ。

次に言つと、さつき言つた迷・名探偵といふ言葉の意味は迷探偵で

もあるし名探偵でもあるということだ。

つまり、お父さんは絶対最初に迷が何個かつく推理をする。

つまり迷・迷推理とか迷・迷・迷・迷推理とかだ。

そのときあきれて変えられそうになると必ず何かひらめく。

それはもし、一回目が迷推理か迷・迷推理だつたら名推理だ。

もしそれ以上だつたら迷がひとつづつなくなつていく、

つまり失敗は成功の元というけどひとつずつ事件に必ず一回は間違える、おかしなお父さんなんだ。これでお父さんの紹介は終わり・・・かな？

とにかく、次は僕のお母さんで姓は女の尾島昌子だからツチコミハヤシヒメです。

これもあまりないけど、あまりこの物語には出ませんからちょっと説明します。

えーお母さんはパズル好きで、よく夕食のときなどにクイズを出します。

僕のパズル好きはそこで教えてもらつてているからだ。

後はさつきも言つたとおり出ないのでかかないで、あと出るのは、僕と少年探偵団を作る次郎・角田・真太・正太郎と警部補の健也の幼なじみの真京太郎と

クラスメイト・先生や警察のその他大勢です。（ああ、みんなかがその他大勢つて何だよ！ていつてきそつ。）

とにかく登場人物紹介は終わったのでこれから物語を始めます。

## 第一話 序章（後書き）

面白かったですか？

## 第一話 事件が始まるまでの時間

ふあーあ、すつげー眠いよ。昨日、今日が森林学校って言つたとどうかれちゃつた。

まあ重い荷物を持ってばきつと眠氣も覚めるだろひ。

なんたつて今日は初めての森林学校の四泊五日の内の一泊なんだから、荷物も多いんだ。

とにかく今日起きたらお母さんが弁当を作つておいてくれるだろひ。と思つていた。

でも甘かつた、おにぎりとか起きていなかつたのだ。  
寝坊をしているお父さんを横畠でにらみながら（どひしてにらんだかは後で言つ）お母さんを起こしにいった。

学校に行かなきや行けない時間は七時、今は六時なので時間がない。僕はお母さんを起こすと、またもやお父さんを横畠でにらみながら、簡単なものを作つていぐ。

たまごやき・鶏肉・おにぎり・トマートのイチゴなどを見込んで入れてく。

何とかできてできるだけつめこむとリュックの中に入れて家から出て行つた。

すると、実は簡単なものを作つていたので、たつた三十分でできていたんです。

つまり、急いで出たので三十分じいだ。そして急いで走つていつたら五分ぐらいでつくことになる。

そして、三十五分に着いたら門は閉まつていて。そして、時間を間違えたのかと考えながら歩いてうちに帰る。

一時間早く来ちゃつたのかな？

とか

まさか、明日遠足の日じゃないよね？

とかを考えながら歩いて帰ると家の道は十五分、うちに着いたら

五十分ぐらいだった。

するとお母さんがおきてきて

「あら、おきていたの。じゃあさ、ちょっと朝ごはん作ってくれない。

もし作ってくれないのなら今年はもうゲームも漫画も本も買わない  
しあ年玉も渡さないからね！」

ほとんどの脅迫じゃないか。

二つ目のから鋭くなつたお母さんの口調にこう思つた僕は頭を抱え  
たくなつたが、

しうがなく朝ごはんのおにぎりを作つてあげた僕もひとつを急いで  
で食つて、時間を確認する。

なんともう五十五分になつていた。お母さんが

「いってらしゃい　。」

といつたのを、いつきますとも返さずに、急いで出て行つた。  
そして学校に着くともうすでにみんな着いていてバスに乗る準備を  
していた。

何とかバスが出るには間に合つたが、茶木茶木小学校は時間に厳しく、

クラスの中で一番来るのが遅かつたものは、遅刻マンなどといふ名前をつけられて、

しかも三日連続で遅刻マンになると遅刻大王になるという伝統があるだから僕たちはこんな伝統いらねえだろ。

といつも思つている。つまりぼくはその遅刻マンになつてしまつた  
わけだ。

幸いにも今までいつも早く来ていたので遅刻大王にはならなかつた  
が、いつも早く来ていたのでみんなにずっとひやかされた。とにかくバスは出発して各班のレクが始まった。

茶木茶木小学校ではひとつの学年に一つか三つクラスがある。

四年生は三クラスで、班は十班まであって、一班から三班が一組で

四班から七班までが一組で

一番多いのが七班から十班までの三組だ。

一組と二組は一つの班の人数が六人ぐらいだけ三組は一つの班の人数が十人もいる。僕は三組の八班だ。

バスは全部で四台あって一号車は一班の男と四班と七班だ。

二号車は一班の女と五班と八班だ。僕はこのバスに乗っている。

三号車は一班と六班と九班だ。最後に四号車は三班と七班と十班だ。

バスは小型だけど一号車と二号車はけつこうあいている。

だけど三号車と四号車はぎゅうぎゅうでレクどころじゃなくなる。

僕も三年のときの遠足で同じようにバスに乗ったけど運悪く

三号車でマイクを使って話し始めようとするとみんながぎゅうぎゅうづめになつて、

なぞなぞを出すところは書いてある答えを見られたりして大変だった。

しかも、一息ついひとつ背伸びをすると立つていた女の子のお尻りを触つてしまつて

「痴漢！」

て叫ばれてしかも思いつきりけられて大騒動になつた。

僕はその大騒動のときお尻りを触つた子の横について女の子を触つた子に向かつてやつたけりが、

横にいたこの僕に思いつきり当たつた。

しかもバーのようなところでほおづえをかけていたので思いつきり頭にぶつかつた。

さらに、不幸は重なり、その子は空手を習つていて有段者だったのだ。

結果、僕は覚えてないけれどそのままその場で気絶したらしい。

しかも、そのとき僕は一週間、記憶喪失だつた。

僕は、一週間後、見舞いに来たけつてきた子がこいつ言って頭をたたいてきた。

「まあそんなバカみたいな顔すんなよ。」

そして、頭がただでさえぐらぐらしていたのに頭をいきなりたかれたので僕はまた氣を失つた。

そして五時間後、ぼくはやっと意識をとつもどして記憶も取り戻したらしい。

なので、バスの三号車と四号車と、空手の有段者の女の子は僕の天敵になつた。

だからどうしても七班か八班になりたかった。今年は何とかなれてよかつたけど油断せずに、

来年からもどんな人と一緒になつても七班か八班になりたいと思っている（でも空手の有段者の女人とはやっぱりヤダ！）。

では暇つぶしにレクででたなぞなぞを十連発（答えは泊まる場所についてから！

1 熱があるときは走り回つて働いて熱がないと休むものって何だろ？

2 突然おなかを壊したとき病院まで何秒かかるでしょう。

3 笑いながらあめを食べたときあめは何個たべたでしょう。

4 えんぴつを使わずに田をつぶつて書いたものなんだろう。

5 顔の真ん中に「つ」の字をつけて泳いでいる魚つてなーんだ。

6 ワニ+ワニは何だろう

7 絵を書いて見せたらひらがなの「え」をかいて。とつけられた。さてどういう意味だろう？

8 おじぎを何回もして頭をぶつけると役に立つものなーんだ。

9 柿の木を見るとおなかが減りみかんの木を見るとおなかがいっぱいになつた。なぜ？

10 毎日朝もひるも夜も追いかけっこをしているのっぽとちびのものつてなあに。

そして、今日お父さんをにらみつけた理由とはじつは、今日お父さんが森林学校に来ることになつてているからだ。

まず最初はお父さんのわがままな言葉から始まつた。僕が森林学校に行くということをお父さんに言つたら

「えー、そんなこと早く何で言つてくれなかつたのー。こくよー先生たちには取材といつことと一緒に行くよー。」

とお父さんが言い始めたのだ。

「うこうことはわかつていた。お父さんは大の山好きだ。こんなことを言われたら、何をしてでもいくに違ひがない。

だけどあえて言つたのは絶対こないと思つたからだ。

パパは上司の言つことなら何でも聞くので上司の一郎さんに頼んでみんなが行つてもいいといわないように上司のみんなに頼んでもらうんだ。そうこうことで一度はほつと安心したんだけど、甘かった。ある日、上司の一郎さんがうつしに来て今度の取材の打ち合わせに来た。そして最初は大丈夫だと思つて自分の部屋でゲームをして遊んでいた。

すると、お父さんに呼ばれたので歩きながら客間に向かつて行くとお父さんがこんなことを話していた。

「実は、今度息子が森林学校に行くんですよ。それについてそれでその滝川荘といふことに

取材といつことで行きたいので、時間をくれませんか。」

そして、お父さんが僕に気づいた。

「あつ來た來た、おい健次！今一郎さんに森林学校のことお話ししているんだ。」

僕は、それを聞いてまだびっくりして一郎さんを見た。一郎さんは「それはだめだよ、今度の森林学校じゃなくたつて家のすぐ近くにあるんだからこつでもいけるだろー！」

と怒つたような口調で言つてくれた。でも、珍しくお父さんは一郎さんに対する反対して

「何言つているんですかー。今季節は取材で忙しいのでもつたく山にいけないんですよ。

だから今季節のあの山入つたことがないんですよ。」

と言つた。一郎さんも負けずに言い返す。

「だが、きみなら勝手に休暇をとつてでもやまにこべとおもうんだ

が。  
「

確かにそのとおりだ。しかしあ父さんはあきらめない結局負けたのは一郎さんだつた。

一郎さんは、取材を許可してぼくへ手を合わせて誤りながら会社に帰つていつた。

それで僕は、がっかりしながら今日を迎えた。しかしあ父さんは寝坊して、

どうやらみんなについて来ていないみたいだ。

それで僕はバスのことと、お父さんのことに喜びながらひとつ泊まる場所滝川荘についたのだった。

答え

- 1 アイロン
- 2 9秒(急病)  
いそび
- 3 二個
- 4 あぐら
- 5 かつお
- 6 わし(わ2+わ2=わ4)
- 7 まるで絵になつてない(。で「え」じゃなくなつたから)
- 8 とんかち
- 9 気(木)が変わつたから。
- 10 時計の針

## 第二話 そして第一の事件

とうとう滝川荘に着いた。パラパラとしおりをめくる。たしか、最初は集合写真をとつて掃除をするはずだ。

しおりを見るとそのとおりだった。それで、まずは集合写真を撮つた。

そして、自分の部屋にいった。班で男と女に分かれる。つまり部屋は二十室ある訳です。

ちなみに僕は八号室です。ついでに言うと一号室から十号室が男子で十号室から二十号室が女子の部屋というわけだ。

同じ部屋の男子は次郎、真太、正太郎、角太君たちで、実は次郎君は一郎さんの子供だ。

僕の名前はお父さん（そういうべきしているんだろう）が健也だから、

お父さんの次に健康になるようにと健次だけど、次郎君も僕と同じように一郎さんの次に生まれたから次郎になつたらしい。

じゃあ弟ができたらどういう名前にするつもりなんだろう。といつも考えているらしい。

ほかの子を紹介すると、真太は影の薄い男の子だ。

勉強はよくできるし行動的な男の子なんだけどなぜか影が薄い。たぶん運動会のときでもあまり活躍しないし体育もあまりできないし無口なのでみんな気付かないんだろう。

しかし、僕が前お母さんに出題されたパズルを真太君に出題したら簡単に、

すらすらと解いてしまった。しかも全部正解だ。今日のバスの中でもパズルの答えを言われる前に全部僕に教えてくれた。

僕もパズルが好きで簡単なのはすぐ解けるけど僕も難しいと思った問題さえも楽に解いていた。

本人はあまり考えてないというのだが、パツとひらめくらしい。

それで、パズルがすごいということが分かつて班に入れる 것을僕が強く希望したので今回は同じ班になれた。

最初から、真太君はみんなに嫌われてないというかすかれているので誰も反対しなかった

もちろん、なぞなぞやクイズを僕が考えてみんなに試しに出した時一番初めに答えたのは真太君だ。

次は正太郎君、テストの点が悪いけど運動に関してはすぐすぎるらしい。

四年で陸上部に入ったとたんに部で一位になつたらしく。

そして、六年になつたらもう全国大会にいけるとうわさされている。しかし、正太郎は“伝説の遅刻大王”と言つ異名がつくほど遅刻が多い。

それのことば今では学校の七不思議にされるほどだ。ちなみに真太とは、

真太が頭がいいので勉強のコツを正太郎におしえてあげる代わりに運動のこつを教えていて、つまり教えあつてゐるらしい。

それをやつてゐるうちに仲良くなつて真太君に紹介されて仲がよくなつた。

それで、班を決めるとき最初に正太郎を見つけた。

最後に角太だ。角太は、あまり目立たない子で同じようなので真太に声をかけると氣があつて、

仲良くなつたらしい。僕には正太郎君と同じように最近知り合つて、一緒にになりたいといつてきたのは真太だつた。

だけど意外と角太は肝がすわつてゐる、次郎も肝がすわつた方だが、角太も同じくらい肝がすわつてゐる。

ちなみに班になろつと声をかけた順は次郎・正太郎・角太・真太の順だ。

真太を一番初めに見つけようと思つたけど影が薄くてよく分からなかつた。

けれど、角太と一緒にいたので最後にすぐ見つかった。

とにかく、みんなの荷物を部屋の隅に置いて各場所にみんなは行つた。

いくところは組ごとに分かれていて、一組は各部屋、二組は食堂、三組は台所の掃除をする、

僕達は三組なので台所だ、でもまだあつて三日にご飯をみんなで作るときご飯とカレーと肉じゃがに

分かれて作るのでご飯とカレーと肉じゃがの台所がある。なので僕達も三つのグループに分けた。

でも、これが面倒だつた。グーパーはできないからグーチョキパーでやつた。

でもにんずうがおおくて三人組でやることになった。

それで、やろうとしたけどぜんぜんできない。

人数は、三十人なのでちょうど十人ずつにしたいんだけど、まったくできない。

しううがなく出席番号で一から十までがカレー、十一から二十までがご飯、

二十一から三十までが肉じゃがの台所をやることにした。僕は七番で、カレーだ。

他にいる僕の知りあいは、次郎君と真太君だ。

ぼくたちは、三人で仲良くカレーを作る台所をきれいにした。

そして、最後になべを整理しようとすると、いきなり誰かに肩がぶつかつた。そしてその子に怒りうとした。

「痛いじゃないか

あつ！」

怒つて、文句を言いながらぶつかってきた子を見て驚いた。なんと僕の好きな小島京子ちゃんだったのだ。

この子は、幼稚園のころからいつも一緒に、僕の初恋の人になつた。しかも京子ちゃんは、小島直哉 校長先生の娘だ。

それに、美人で、頭もよくて足も速くてみんなのアイドルだ。

だけど、小島京子ちゃんは背が低い。背の順では一番前にいつもいる。

それに、この前保健体育のとき「十歳になるまでの平均身長がのつていて、調べてみたら七歳だった。」

ということは身長が小学一年生か一年生ぐらいの平均だ。だから、みんなあまり集まつたりはしない。けれど、僕はあまり気にしていない。

なぜなら、僕の平均身長は八歳ぐらいだからだ。それに、じつは京子ちゃんは僕と同じ班だ。

だから、僕は宿泊学習の内に京子ちゃんの氣を引ひきとと思っている。まあそれは置いといて、多分今そのまま怒つたら京子ちゃんの氣を引けないだろう、

それどころか、マイナスポイントが入つてしまつ。僕は急いで京子ちゃんが

「あっ、すいません。ごめんなさい」と誤つてゐるのをさえぎつて

「別にいいよ。それに、今のは横をよべ見てなかつた僕が悪いんだし、気にしなくていいよ！」

と軽く誤つた。よし！今ので、僕のことをこいつちのが悪いのにこいつのせいぢやなくて、

僕のせいだとしてくれる男といふこと、いいポイントが入つただろう。周りから

「ヒューヒュー」

と声がするけど氣にせずにはじめようとしたけど、やつぱり氣になつて振り向いて怒りうとした時

ちょうどいい具合に先生が来たのでみんな自分がやつてていることに戻つていぐ。とつあえず京子ちゃんに

「じゃ、一緒に整理しようつか。」

と言つた。京子ちゃんもその氣だつたみつで、すぐつなづいて、一緒にすべの整理を始めた。掃

除は大変だったけど何とか京子ちゃんにポイントが入ったのでよしとするか。

今日の予定はこれで終わったので、続いてお風呂だ。一組 二組三組の順に男から入るので、僕たちは三番目だ。

とりあえず、今日の予定はこれで終わりなので一時間ほど自由時間になる。

自由時間といつても布団を敷かないといけないので三十分ほど時間を使うけどとにかく自由時間だ。

急いで布団を敷き始める。僕はあまりトイレに行かないでの一番窓に近い場所になることになった。

しかしひとつの班に一つの部屋があるので一つの部屋が七畳半ぐらいいだ。

だから、布団とか枕とかリュックサックとか荷物を置く場所を入れると結構きつきつなので、

三つぐらいしか布団がしけない。だから布団と布団の間にまたがって寝る人が二人いることになる。

それで、そのことでもめた。間にいると寝相が悪い人は、隣にいる人をけつたりするのであまり

被害が出ない一番はじにいくことになる。僕は、

「僕、いつも朝起きたら転がってベッドから落ちて十メートルほど動いているし、

いつも僕はあまりトイレに行かないからトイレに行こうとして人を踏まないから僕ははじの方のがいいよ。

だから、僕は窓のほうにいたほうがいいよ。」

という言い分を変えないで何とかはじになつた。

もう一つのはじはすごい争奪戦になつた。

次郎や真太や正太郎がいつもトイレに行くのでドアのほうのはじだ！と言ひ合つた。

結局じゃんけんになり最後は正太郎がはじになつた。

後の人もじゃんけんで決め、窓際から、僕、真太、次郎、角太、正

太郎の順になつた。

僕が、一番窓際になりたかつた理由はいつも僕は窓際のところで壁に沿つて寝ているからだ。

いつもホテルに行つたとき真ん中に寝るといつの間にかベッドから落ちていていることもあつた。

しかも、落ちた場所はいつも壁がある場所だし、いつも寝ている場所とちょっとでも違うとなんか寝られない時もある。

それで、ぼくが真ん中とか間に行つたら、窓際の人に対する迷惑がかかるし、よく寝られないと思つたからだ。

そして、夕食を食堂で食べることになった。うちから持つてきた弁当を食べることになつてるので、

僕も家で作つた弁当を食べた。簡単なもので作つたので、みんなのものにはかなわなかつたけど、一応おいしかつた。

そして、就寝の時間になつた九時になつて、とりあえず今日はなんとかぐつすりと寝られた。

そして僕たちは何の物音も聞かぬままどんどん深い眠りについていったのだった。

## 第四話 やして第一の事件^2^ (前編)

といつも事件がおきます。

## 第四話 そして第一の事件へ2

次の日、僕は六時十五分に起きた。六時半に起床なので何とか時間は過ぎなかつたらしい。安心してドアのほうを見ると、やけに静かだ。僕の隣で真太のいびきが聞こえるので、わざとけりながらドアのほうへ向かつた。途中で

「うわっ、なつなんだ。」

という声が聞こえたけど無視して上履きを確認する。すると、僕と真太の上履きしか置いてない。

事件だ！僕は直感的にそう思つた。真太も後から

「どうしたんだよ、おい健次！あれ、上履きの数がおかしくないか？それにみんなは？」

さすが真太だ。よく分かつた。たぶん事件かもと思つてゐるんだろう。

「まさか全員誘拐したのか？でも、なんで僕たちは誘拐しないんだ？」

と自問自答している。僕は真太と僕の上履きをそろえると

「よし、ワトソン君事件を確かめにいくぞ！」

と腕をつかんで引っ張つた。しうがなく、行く気になつたらしい。靴を履いてドアを開けた。ドアを開けると女の部屋のほうから声が聞こえてくる。僕は

「なんだよ。なんで僕がワトソンになるんだよ。ブツブツ。

。」

と言つている、真太をそのまま引っ張つて声が聞こえる場所へ行く。人ごみの中に次郎と角田と正太郎がいたので話しかける。

「おい！何が起こつたんだ？」

「なんでも十八号室で人がいなくなつたらしいんだ。」

そう次郎が答えてくれた。同じ班の人人がいなくなつたから怖がつているのか顔が青い。よく見ると角田も顔が青い。僕は

まさか京子ちゃんじゃないよな。

という不安を胸にしながら十八号室に向かう。入ごみがざわめいている。

「小島京子ちゃんて言つ子がいなくなつたんだって。  
といつ声がざわめきから聞こえてくる。僕の不安が当たつてしまつた。

僕はその場に倒れそうになる。そこをちょうどワントン君（ああ眞太だつた）が支えてくれた。

とりあえず、間を通りて前に進んでいく。

こういつときチビだと便利だ。途中で眞太を残して十八号室の中へ向かう。

中では京子ちゃんと仲のよかつた、班の子が泣いている。その隣で先生があやしながら、

話を聞いている。その隣で先生たちが話している。

「おかしいなあ、入り口は先生が見張つていたし裏口もないしトイレの窓もとてもじやないけど通れないし手も届かないよな。」

「もしかしたら、天井裏を通つたのかもよ。あそこは開くようになつてゐるし、

布団の上に乗ればチビでも届くよ。それに、あの子なら天井裏を通れると思つし。」

と、布団の上の天井を指差している。だけどほかの先生がダメだしをする。

「第一、なんで人目を避けてわざわざ天井裏を通つてまで、外に行く必要があるの。」

確かにそのとおりだ。いつたいなんで人目をさけていたんだ？その時さつき眞太が言つっていた言葉が思い浮かんだ。

「まさか全員誘拐されたのか？」

まさか、本当に京子ちゃんが誘拐されたのか？と考えながらみんなのところに戻る。

戻ると、角田と次郎と真太と正太郎が待っていた。

四人に今見てきたことを話し、今思っていたことをみんなに話す。みんなさあざまな反応をした。次郎は

「まさか・・・・ありえないよ。」

顔が青いので、おびえながら離しているように見える。角田も同じように

「そうだよ・・・・次郎の言つとおりだ。」

といつてきた。正太郎も

「そうだ！絶対に誘拐なんてありえるはずないだろ。先生が言つたとおり誘拐されたってどうやって逃げるんだよ。

まさか幽霊がやつたなんていうわけじゃないだろ。」

『幽霊』という言葉が出たとき、角田と次郎がぴくっと震えた・・・・よつた気がした。

でも、真太のこの言葉を聞いて、それも忘れてしまった。

「誘拐って言うのは冗談だよ。ワトソン君。」

「何言つてんだよ！お前がワトソンだらうが。」

「そんなわけねえだろ。おれのがパズルもできるし、観察力もあるだろうが！」

「俺のがホームズの性格に合つてるんだよ。」

「でも、ホームズといつたら推理じゃないか。俺のがひらめき力があるじゃないか。」

「ひらめきと推理は関係ねーだろーが。お父さんが新聞記者なんだから、俺のが社会の知識がいっぱいあるんだよ。」

「俺だつて、次郎からお父さんの話を聞いて社会の知識があるんだ

よ。」

「という僕たちの口げんかを止めたのは正太郎だつた。

「はいはい分かつた。どうせなら一人でホームズやってな。」

正太郎は力も強いので抑えられたら手も足も出ない。しじうがなく

今日は朝食を食べることにした。

その時僕の近くの電話が鳴つた。

プルルルルー プルルルルー

ガチャ

僕は、怖がりながら受話器をとつた。  
そこから低い声が聞こえた。

## 第四話 そして第一の事件^2^ (後編)

さて、電話の人の正体は?  
そりゃ京子ちゃんは誘拐なのか。

## 第五話 そして、第一の事件へ

その時僕の近くの電話が鳴った。

プルルルルー プルルルルー

ガチャ

僕は、怖がりながら受話器をとった。そこから低い声が聞こえた。受話器から車の音が聞こえる。

どうやら外の車の交通が盛んなところからかけているらしい。

「おい。茶木茶木小学校の生徒か？よく聞けよ。京子は預かった。警察を呼んだって無駄だ。取られても、取り返す。分かったか？校長先生にでも連絡すれば取られた時京子を守ってくれるかな。まあとられるようなことはしないけどな。」

電話の主がしゃべり始めた。ゆつ、誘拐！僕はびっくりして、

「何だつて、お前は誰だ！京子ちゃんは無事なのか？」

と質問する。しかし誘拐犯がそうしゃべるはずはない。

「つむせーーいまいつたことをぜつたいにつたえておけよ。そうだな。一つ二つてやる。京子は無事だ。今言つたこと忘れずにな。ちゃんと先生に伝えろよ。」

「まで！まだ質問に答えてないだろ！」

「俺は話が終わったんでな。」

ガチャッ プー プー プー

僕は受話器を置く。何でことだ。本当に誘拐されていたとは

。僕が大声を出したのでみんなが集まつてくる。

「京子ちゃんはぶじなのか？」だつて本当に誘拐されたのか？

という声が聞こえてくる。真太達も近づいてきて僕に聞いてくる。

「まさか本当に、京子ちゃん誘拐されたのか？無事なのか？」

「うん・・・・・・・・・。」

といつてその場にひざを付くぐら<sup>イ</sup>いしか僕にできることがなかつた。

第五話 そして、第一の事件へ まへ（後書き）

短くてすみません

## 第六話 滝川神社で近道発見 そして宝探し始め！<1>

その後は大騒動となつた。まず、騒ぎを止めようと先生がきたところに話すとほかの人にも事情がわかつてしまつて、朝食を食べている場合じゃなくなつた。食べたい人は食べてもいいことになつたので、僕は急いで食べて部屋で待機していると、警察や校長先生などが来た。僕は休んでいる間に今日の予定を見た。

『九時 滝川探検 滝川山を探検しよう！

十時 自然のメモ 滝川山を探検して見たり聞いたりした自然のことをメモしよう。

(終わつたら)

自由時間 ドラムンなどで遊んでよう

十一時 昼食 ご飯や魚

十四時 自由時間 滝川探検にもう一回行つてもいいです。なんでもしていいですよ。

十五時 草むしり 煙の草むしりをしよう

十八時 風呂 昨日と同じ順番で

十九時 夕食 おにぎりやから揚げ

二十一時 就寝 明日の朝は早いので気をつけよう

』

というのは、表のスケジュール。実は、生徒でスケジュールを書いているところがある。それが、通称裏のスケジュール、先生にはもちろん他の班の生徒にも教えてはいけない。

僕たちの班にももちろん裏のスケジュールはある。これがその後だ。

『二十三時 枕投げ 起きなかつたら集中攻撃

一時 秘密の話

二時 ほんとの就寝

』

とりあえず八時になつた。するとノックの音がする。僕は

というわけだ。

とりあえず八時になつた。するとノックの音がする。僕は

「ちょっと待ってください！」

と言つてリュックなどをはじに寄せた。布団は洗濯をする場所へおいてきたので、今は後二人は入れる。

僕はドアのほうに近づいてドアを開けようとしたすると、さつきから顔が青くなつていた角田と次郎がもつと青くなつたような気がした。

そんなことは気にせずに、

「どうぞ入つてください。」

と言つてドアを開けた。開けて見るとスーツをピシッと着こなしたかつこいい人がいた。僕が中で話そと部屋の中へ入れようとすると、正太郎が歩いてきて

「おっさん誰ですか？」

と聞いた。

「お、おっさん！」

と、その人が引く。でもすぐ真顔に戻つて、ポケットから何かを見せていつてきた

「はじめまして、私は眞 京太郎とります。職業は警視庁の警部補です。」

何とその人が見せてきたのは警察手帳だつた。本より運動が好きな正太郎と、あまり本を読まない角田は、別に驚きもしなかつたがお父さんが新聞記者で仕事の話をいつも聞いている僕と次郎、

そしてその話を聞いていて本も読んでいる眞太は目を丸くして驚いた。

何で、ただの誘拐犯から警視庁の警部補がくるんだ？ 正太郎も僕たちの説明を聞いて部屋の中で話を聞くことになつた。眞警部補は口を開いた。

「おい！ 誘拐犯人から電話をかけられたというのはだれだ！」  
「ぼくです。」

正直に答える。最初は怖い人かと思つたけど結構やさしそうだ。で

も、すぐ拳銃を発砲しそう。

そういうえば、この人に一番合はそうな言葉があったような気がする。  
・・・・あつ、思い出した。

あぶない刑事だったたつけ。そういうえば『まだまだあぶない刑事』って言つ映画もあつたんだつけ。

まあそれは置いといて、そのあぶない刑事が僕に質問をしてきた。

「君、名前は？」

「尾島健次です。」

その言葉を言つたとき、刑事さんが妙な顔をした。そして真顔に戻り

「君、お父さんの名前はなんと言つのかな？」

「尾島健也ですけど・・・。」

「そうか・・・。」

すると、また妙な顔をした。でも、今度のは、懐かしいっていう感じだ。

でも、そのあとば、もつやんな顔はせずにどんどん質問をしてきた。  
「電話の内容を思ひ出しつて言つてくださいー。」

とか、

「電話をかけてきた相手の声の感じは？」

とか、

「かけてきた人に心当たりはあるか？」

とかどんどん質問してきた。そして、質問攻めにされて九時になつたので、やつと開放された。

## 第七話 滝川神社で近道発見！そして、宝探し始め！ ▶ 2 ▷

次のスケジュールを思い出してみる。

たしか、

『九時 滝川探検 滝川山を探検しよう！』

だつたはずだ。とりあえず外に班で並ぶ。

そして、説明を聞く。一組の先生をやつてはいる、恵子先生が説明をする。

「まず、班長にこの赤いカードを配ります。班長さん。手を上げてください。」

僕が班長だ。

手を上げると、近くの先生が赤いカードをくれた。

そのカードには、

第一チェックポイントとか、第二チェックポイントとか書いてあった。

そして、隣にその説明らしきものが書いてあった。

第一チェックポイント

じゃんけんで、買つたらあめがもらえるよ。写真も撮つてもらおう

第二チェックポイント

川原にいる先生にしゃしんをとつてもらつてね。

第三チェックポイント

班長が引いた九九の段を一人ずつ言おひへ。まちがえたらいしょから。

という感じだ。すると、先生が説明を再開した。

「みなさん、班長のカードをよく見てください。チェックポイントなどの説明がかかれていますね。

それでは今から地図を配ります。今度は副班長！」

副班長の真太に地図が配られる。赤い線が書いてある。見てはいると、

また先生が説明を再開した。

「よく見てください。赤い線が引いてありますね。ここが歩くルートです。

まず、ここを出て、まっすぐいくと滝川神社があります。そこが第一チェックポイントです。

そこをでて左に行くと川原があります。そこにいくまでにカメラが置いてあるので、近くにいる先生に、

自分たちの写真を撮つてもらいなさい。それが第一チェックポイントです。

あとは、川原で、このカードに書いてあることをして、この地図の赤い線をたどつて帰つてきてください。

ちゃんと方位磁石を見て道を間違えないように。

そして、チェックポイントでやることが終わると、シールがもらえます。

ここに戻つてきたら、しおりを見て何をやるか確かめて、しおりに書いてあることをやってください。

それでは、一分ごとにスタートします。では、一班から進んでください。」

僕は、八班なので最後のほうだ。とりあえず、出発まで待つ。七班が出発した。もうそろそろだ。僕たちは立ち始めた。

そして、先生の

「八班、行つてください。」

という声で門に向かつて歩き始めた。運動会の行進のときのよつこ歩き始める。手と足を大きく降つて歩いていく。

すると、あたりまえだけど滝川神社が見えてきた（見えてこなかつたら怖いよ）。僕たちは階段を駆け上がる。

正太郎がどんどん前の人を抜いていく。そして。前の人があけたところを僕たちも走つて駆け抜ける。

足が遅い真太は後ろで、ちょっとずつ歩いてくる。僕たちは班長から一人ずつ、

先回りをしていた咲先生とじゅんけんをしていく。

結果、僕と真太と正太郎は勝ててあめがもらえた。しかしそれ以外はすぐ負けてしまった。

それで、まずあめをもらえた、僕と真太と正太郎で写真を人数分、つまり三枚撮つた。

そして、負けた人も入つて十枚とつた。そして、下に下りようとすると。すると、チラッと鳥居が見えた。

僕はみんなを誘つてお参りに行く。ほかの班の人も気付いてお参りにきた。

すると、またチラッと道が見えた。近づいてみると階段があつたので、

「これは近道だな」と思つて

「おーいここに近道があるぞ！」

と皆を呼んだ。しかし、近道だと思う前に不思議に思つべきだつた。ちゃんと僕たちが上つてきた階段があるのになんで、こんなところに階段があるのだろう。そして、なんでこんな誰にも見つかりそうにない場所が、

階段が見えるようになつていて、草が伸びてないのだろうと。しかしもう遅い、皆も近づいて来る。それに、僕はそんなところを歩いてみたいと言つ好奇心で

そんなことは思いもしなかつたからだ。だから、皆を呼んだ。皆も、そんなことを思つてない。

そして、この道を見たときの皆の意見は三つに分かれた。一つは、近道だから行こうという意見で、

「絶対に近道だよ。だつて先生行つちゃだめだつて言つてないじゃん。」

と言つてきた。「一つ目は行かないほうがいいと言つう意見で

「もしかしたら遠回りかもよ。それに、ぜつたいにあの道につくなんて保証なんてないじゃん。」

と言つてきた。最後はとにかく行きたいと言つう意見で、

「滝川探検なんだから、探検してみようよ。」

と言つてきた。すると、どんどんとにかく行きたいと言つ人が来て、行つてみるとことになつた。

ひとりは、出てきそなとひりに行つてそこで待つていて、一人はそこを通る人は僕になつたので代表して歩いていく。とりあえず、急いで歩いていく。

階段を下つていくと結構急だつた。でも、段はついていたので転ばないよう気を付けながら歩いていく。

道がちょっとまがつている。大きいブームランのような形だ。光が見えてきたので歩いていく。

すると、道は一手に分かれていった。立て札が書いてあるがよく読めない。一つは

『神社跡』

と書いてある。空白の場所は薄れて見えない。もしかしたら滝川神社なのかもしれない。

と思つて僕はそう書いてある場所へ向かつた。僕はスタッフラサッサと歩いていく。

そして、僕は忘れていた。滝川神社はちゃんとお参りできているので『跡』じゃないことを。

もう一つ僕は気付いてないことがあつた、それは、微妙に僕が向かつている方向から物音が聞こえていることを。

しかしもう遅い、僕は歩き始めてくる。引き返しても皆に馬鹿にされるだろう。

そして、僕はそこに着いた。僕は、大声で

「誰かいりますかあ！」

と言つた。すると、さつきの物音が一段と大きくなつた。そこで、僕はもう逃げ出していた。

もう、僕には勇氣は残つていなかつた。僕は分かれ道まで走つてい、そこで、さつきと違つぽうに曲がる。

せめて、意気地なしとは言われたくないのでここだけは確かめる。さつと突き抜けると、そこでは真太が待っていた。

僕は真太と一緒に皆がまっている場所へ向かう。そこでは人数が増えた皆が待っていた。僕は、皆に

「あのね、あそこにに行つたら 。」

といつに話した。僕への皆の反応はさまざまだった。驚く人もいれば笑う人もいる。

しかし、次郎と角田は青い顔をしていた。と言つわけで、僕の探検少年時代は終わつたのだった。

そして、僕達は次のチェックポイントへ向かつてく。そのときも僕達は気づいてないことがあつた。

僕達が去る後ろで何者かがあの近道から僕達を除いていることを

僕達八班は次のチェックポイントへ行く。とにかく、先生に写真を撮つてもらうはずなので、

先生が立つているところをよく探す。よく探すと国先生の所にあつた。国先生に頼んで写真を撮つてもらう。

とりあえず第一チェックポイント通過! よく見てみると、先生のシールがぜんぜん減つてない。

どうやら、みんな分かんなかったようだ。僕は

「先生のシール見ろよ! ぜんぜん減つてないぞ。もしかしたらみな、分かんなかったのかもよ。」

「マジで! ジやあ、一番乗りは俺たちだな!」

正太郎が、うれしがつている。すると国先生が言つた。

「おい! それは間違つているぞ。実はほかにもカメラがおいである場所があるんだ。

もしかしたら皆そこで撮つてているのかもよ!」

「マジかよ。でも、そうだつたらやばいよ! みんな急げ!」

正太郎が僕達を置いて川原に向かおうとする。

「ちょっと待つてよ。別に競争しているわけじゃないでしょ。

それに、僕達が近道を見つけたとか騒いでいたから僕より後ろの一班は、と見ていたでしょ。

それに前の班の人も騒ぎを聞いて、二つの班が来てたんだから。それに途中で三つは班を抜かしたんだから今三番目ぐらいだよ。川原に行ってからでも十分抜かせるつて、もしかしたら一つの班の人達、案外算数が苦手なのかもよ。

全員言うのが目標だから、一人でも算数の苦手の人がいたら、楽に抜かせるかもよ。」

と真太が論理的に走らないでいいということを話す。でも、正太郎は真太の言つ事を聞かずに飛び出した。

僕達はしうがなく正太郎を追いかけて川原に向かう。真太の言つとおり川原では前の二班が九九と悪戦苦闘していた。外では人に九九を教えないように先生が見張っているし、倉庫の中なので周りからの声も聞こえない。

だから、同じ班の人には、九九の段ぐらいしか教えちゃだめだし、もし誰かが人に答えを教えたら、

もう一回代表者が、カードを引くところからだ。一班も二班も五とか二とか簡単な問題が出ないので、大変そうだ。

幸いにも、僕の班には九九の苦手な人がいないので、すぐ終わると思う。

## 第八話 滝川神社で近道発見！そして、宝探し始め！<3>

とりあえず、開いている場所へ行つて代表者の僕がカードを引く。すると、出たのは五の段だつた。

いきなり簡単なのを引いたので僕はすぐ言つてしまつた。

そして倉庫から出て、次の真太へ段を伝える。真太もすぐ終わつて、入つてから一分もたたないうちに出てきました。

そして、僕が角田へ段を伝えて、女子もやり、やつと最後から一番目の正太郎になつたとき、

一班の人気が帰ろうとしている事に気づいた。正太郎も、真太に教わった成果が出たのかすぐ終わつた。

最後は、真太よりちょっと頭が悪い、次郎だつたので真太と同じように出でてきた。

皆に一班のことを知らせると正太郎が急いで走ろうとしている。僕達も走る準備のためにアキレス腱を念入りにやる。

そして、僕がスタートの合図をする

「よーいドン！」

みんないつせいに走り出す。やっぱり一位は正太郎だ。どんどん走り出す。

すると、一班が見えてきた。一班は気づかないのか歩いている。そして、一班を抜かした。

一班もやつと気づいたのか走り出す。しかし、もう遅い。全員一班を抜かしている。

とりあえず最期まで全力疾走だ。その時、誰かが追い上げてきた。正太郎の次に足が速い進君だ。

正太郎は手加減しているのかちょっとあるき気味だ。みんなが

「おーい。正太郎！走れー。」

と応援する。正太郎も気付いたようだ。軽く走り始める。門が見えてきた。

今のところ進が勝っているのか？今、一人が並んでいる。

だけど、正太郎のほうが余裕がありそうで、息も乱れてない。あと三十メートルぐらいだ。その時、

「再スタート！」

と正太郎が叫んだ。そのとたん、足が速くなつた。進も、スピードを上げようとするが全然あがらない。

とうとう正太郎が門を通つた。僕は、門を通ると正太郎に聞いた。

「ねえ、なんで再スタート！て叫んだの？」

「ああ、それのことか。俺がパソコンやついたらクリックをしてキャラクターを走らせるゲームがあつたんだ。

早くクリックするとキャラクターのスタミナがなくなるから早くクリックしそうすぐスタミナが切れるんだ。

それでやけになつて、いろんなところをしていたら、いろんな変な言葉が出てきてさ。

そこに再スタートっていう言葉があつたから押してみたら、スタミナも回復をして最初からになつたんだ。

最初からになること以外は、いいことづくしだしさ。スタミナ回復するから現実で再スタートできたらいいなあって思つていたら再スタートが口癖になつて、しかもその言葉を言つとなんか気合が出るんだ。

だから、走るときとかで気合を入れて、本気で走らなきゃいけないときは再スタートって叫ぶことにしているんだ。」

なるほど、そういうことか。再スタートといつ言葉で気合を出すよし！僕も、そういう時は再スタートって言つ言葉じゃないけど、そういう言葉を言つことにしてみるか。まあいいや。とりあえず次の事やるか。みんながしおりをめくつて何をやるか調べている。

でも僕は覚えている。確か、自然のメモだつたはずだ。しおりの最後のページにメモをする。

僕はしおりを取り出すると、急いで書いた。自由時間で遊びたいから

だ。五つか六つメモをすると、

トランプの準備をする。この前覚えたマジックをする準備をする。

みんなが戻ってきた。

僕がマジックをしてトリックを当てるゲームをした。それが終わって、ばば抜きをしようとしたとき、

ノックの音がした。なんだろうと思つてあけて見ると、そこには眞警部補が怒っていた。

忘れていた、まだ眞警部補に全部話してなかつた。僕は、知つていることを眞警部補に全部話す。

やつとおわつたらみんなばば抜きに飽きていた。僕はリュックサックをいじついて、新しいゲームを思いついた。

みんなに提案する。

「おい！この方位磁石を見て面白いゲームが思いついたぞ。」

みんなが集まってきたのでみんなにルール説明をする。

「これは針がない中の板のような物が回る卵形の方位磁石だろ！それで、水平にしないで、

卵の先を北に勘であわせてみるんだ。最初の人は不利になるから一回やる。

それで北が卵の先にぴったりあつたら勝ちって言うゲームだよ！みんなやる？」

みんなやるという声が広がつてくる。よし！ゲームスタートだ。まづ、正太郎があわせる。

適当にやつたので南のほうに卵の先が向いている。もう一回やつたが、ほとんど近づかない。

こつこつと繰り返して、やつと僕の番になつた。大体分かつたので、思つたほうに向けてみる。なんとそこで僕の北がぴつたりあつた。

「やつたー！僕の勝ちだ！」

僕がうれしがつた。するとちょうど、いよいよチャイムが鳴つた。

次は昼食の時間だ。僕達は

「朝食食べすぎ超ショック！昼食食べずに中ショック！夜食も食べすぎややシヨック！」

といふダジャレをいいながら食堂へ向かつ。昼食を食べるときも言つていてると先生に

「そうか。昼食食えないのか。じゃあ昼食抜きにしてやるから中シヨックつていつてなさい。」

と冗談を言つてお弁当をとつてきたので僕達は

「今おなががすごく減つています。今抜かされたら中ショックどころじゃなくなつてしまします。」

といつて、お弁当を返してもらつた。そして、すじこ勢いで昼食を食べていく。すると腹が痛くなつていた。

みんなが笑いながら

「ハハハッ、これじやあ昼食食べすぎ中ショックじやん。」

と言つてきた。本当にそくなつていい。僕達は言い返すこともできず部屋に戻つていった。

そして、とうとう自由時間になつた。

僕達の腹の痛さも納まるど、話し合いになつた。真太が言つた。

「これからなにやる？」

正太郎が手を上げた。

「滝川神社の音の正体を暴きに行く。」

正太郎は力が強いのでみんな逆らえない。しょうがなく滝川神社へ向かう。近道に入り、

『神社跡』

の立て札があるところまで向かう。しかし、そこでは音などしなかつた。もちろん神社の中には誰もいなかつた。

そして何の成果もないまま滝川荘へ向かう。その時、たくさんの車が目の前を走つていつた。

その時、僕は警部補に話していなことがあつたのを思い出した。そして、物音の正体も分かつたのだった。

「まったくあぶねえ車だなあ。そう思うだろ健次」

「・・・・・」

「おい！返事しろ！健次。」

「・・・・・んつ、何だつけ。」

「危ないと思うだろ健次。」

「あつ、そつそうだね。」

「お前ちゃんと人の話し聞いているのか？」

「聞いているって、あの真警部補は危ないって話だろ。」

「確かに危ないな・・・・・ってその危ないじやねえよ。車が危な

いって話だよ！やっぱり聞いてねえじやん、お前。」

「あつ、ごめんごめん。なんか考え方していてや。」

正太郎ともろくに話ができなかつた。ある事実に気がついてしまつた  
からだ。僕はみんなに

「みんな急いで、大変なことが分かつたんだ。」

と言つて滝川荘へ急ぐ。早く真警部補にあってこのことを伝えなければ。みんなも追いついてきた。正太郎が聞いてくる。

「どうしたんだよ。ある事実ってなんなんだ。」

「そのことはちょっと待つて、真警部補に聞かせてから話すから。」  
と言つて、真警部補のところに急ぐ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6480a/>

---

山頂の事件

2010年10月10日03時15分発行